



はおかない、とても巧みな表現なのです。読み下すならば、「六と七を識（し）らず」ではなく、「六と七を識（し）らず」が正しい。そういうわけで、この作品には、二×八＝十六 というかけ算以外に、十三＝六＋七 という足し算も使われているわけですが、実は数に関する細工はこれだけではありません。以下に「責子」にみられる数遊びを紹介していきます。本文中、数の箇所は次の枠のとおりです。

責子	白髮被両鬢	肌膚不復実
雖有五男兒	総不好紙筆	
阿舒已二八	懶惰故無匹	
阿宣行志学	而不愛文術	
雍端年十三	不識六与七	
通子垂九齡	但覓梨与栗	
天運苟如此	且進杯中物	

数は二三五六七八九十の計8個が登場しています。

「雍端年十三」の「十三」は、位取りの表記に直せば「一三」です。このことから

「雍端年十三」の「十」の一字に「十」と、「一」という二つの意味を与えてみましょう。すると、この二つの意味を意識すれば、登場する数は、一 二 三 五 六 七 八 九 十の計9個と解せます。ここで四の欠如を、「匹」「四」と変えて補ってみましょう。つまり「匹」を「四」の欠画表記（欠画文字の使用は、漢籍では珍しくはありません）のようにとらえなおすというウィットが潜んでいるのだ、と解してみるのがおすすめです。

すると当然 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 と出揃います。つまり出揃うようにするために

「十」の一字に「十」と、「一」という二つの意味を与える

「匹」「四」と変える

という二つの操作を勝手に行ったわけです。しかしこの二つの操作が、作者の期待通りのものであることが次のようにしてわかります。

いま、と の二操作を込めた形でテキストを再掲します。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	上1
運	子	端	宣	舒	有	髮	上2
苟	垂	年	行	已	五	被	上3
如	九	十	志	二	男	兩	上4
此	齡	三	学	八	兒	鬢	上5
且	但	不	而	懶	総	肌	下1
進	覓	識	不	惰	不	膚	下2
杯	梨	六	愛	故	好	不	下3
中	与	与	文	無	紙	復	下4
物	栗	七	術	匹	筆	実	下5

テキストの横10行を順に上1〜下5としましょう。

上4では

二+九=十一

十+十+一の2義=十+一=十一

上5行では

八+三=十一

さらに下5行でも

四(匹)+七=十一

です。さらに上3行と下3行をあわせた形で

五+六=十一

であり、

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の総和である五十五が、見事に十一ずつに分割された配置になっていることがわかります。この十一という数は、の操作で登場した十と一という数と符合しています。しかしここまでの議論は次の2点において不完全です。つまり

(あ) 五+六=十一については、他の場合と異なり、上3行と下3行をあわせた形となっていて、同一行の和ではない。

(い) に関する符合が何も得られていない。

では次に(あ)と(い)の解決策を考えてみましょう。(あ)を解決するというのは、つまり

は、五＋六＝十一の計算を同一行で行えるような手段を捜すことです。上3行の五の隣の「巳」は「巳（へび）」によく似ています。「巳（へび）」は干支の六番目です。であれば「匹」「四」と同様「巳」「巳（へび）」

とする」ので

「巳」「巳（へび）」＝六

つまり

上3行内で

五＋巳＝五＋六＝十一

となります。この解釈はなんと3つの符合を得ます。

**符合の一つ目は、動物である「巳（へび）」と「六」という数が関係づけられているということ、** において動物に関する「匹」が数「四」と関係づけられているということです。

**符合の二つ目は、** もっと巧妙です。

五＋六＝十一という上3行と下3行をあわせた形を、他の同一行の和に対抗させる手法は、上の五つの行と下の五つの行とを対比させるという意識に基づいているわけです。ここで、我々が数に関して着目した箇所を、上の五行と下の五行とで対比させてみましょう。

上1	白	雖	阿	阿	雖	白	責子
上2	髮	有	宣	舒	有	髮	
上3	被	五	行	巳	五	被	
上4	両	男	志	二	男	両	
上5	鬢	児	学	八	児	鬢	
下1	肌	総	而	懶	総	肌	
下2	膚	不	不	惰	不	膚	
下3	不	好	愛	故	好	不	
下4	復	紙	文	無	紙	復	
下5	実	筆	術	匹	筆	実	
	天	通	雍	阿	阿	雖	
	運	子	端	宣	舒	有	
	苟	垂	年	行	巳	五	
	如	九	十	志	二	男	
	此	齡	三	学	八	児	
	且	但	不	而	懶	総	
	進	覓	識	不	惰	不	
	杯	梨	六	愛	故	好	
	中	与	与	文	無	紙	
	物	栗	七	術	匹	筆	

右では、下段で数に着目した箇所に該当する上段の文字と、上段で数に着目した箇所に該当する下段の文字とを太字で強調しています。いま議論した「五」「巳」「六」の3文字に対応する太字は、上段の「年」と下段の「好」「故」です。「好」「故」の2文字は並んだ順にたどれば、「好故」つまり「故（しきたり）を好む」ということとなり、これと「年」を合わせて考えれば、「年」に関する「故（しきたり）を好む」ということとなり、前述の干支「巳（へび）」＝六、の登場と符合します。残りの3つの太字「無」「与」「与」については後述することとして、

三つ目の符合を得るために縦の列の数の和を考えましょう。

終わりから第3列目の「雍端年十三 不識六与七」中では前述の通り上の十三と、下の六+七=十三とが一致します。このことは、縦の和をとるときには、のようには考えずに、「十」は十のまま扱うべきだ、ということを示唆します。この列は上下あわせると

十三+六+七=二十六

です。一方3列目では、

「巳」「巳(へび)」=六

「二八」

「匹」「四」

が登場しています。詩の内容から考えて「阿舒巳二八」の「二八」は二十八才ではなく、

二×八=十六才 と解するのは当然です。

するとこの第3列では

六+十六+四=二十六

という数が得られますが、これは先に述べた

十三+六+七=二十六

と一致しています。

では最後に3つの太字「無」「与」「与」についてです。「与」は英語の and と同義。「与」の一文字によって and this place つまり「与」のこの場所もまた、上段と下段の対比において注目されるべき場所であるのた、という意味合いを与えられていると考えて良いでしょう。つまり「与」がこの箇所配されることで、上段と下段を対比する見方への符合となっているわけです。では太字「無」の存在は何を意味するのでしょうか。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の総和である五十五は、見事に十一ずつに分割された配置になっていました。「十」個の数と「十一」による分割、というのはどうも格好悪いしかし「無」=ゼロ であれば、「十一」個の数 0 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 の和の「十一」による分割といつことになるわけです。しかし「十」個の数と「十一」による分割では格好悪い」というのは、ここに至って彼が本当に0使用の提唱をしているのだ、ということの論拠としては弱いと言わざるを得ません。じつは0使用の提唱の符号は、我々の解読の端緒に潜んでいるのです。我々の解読は「十三」を位取り表記の「一三」に直すことから始まりました。そして**数の位取り表記が0を必要とする要因の一つであること**は、よく知られている事実です(たとえば「百」や「百一」を位取り表記で表すことを考えてみてください)。

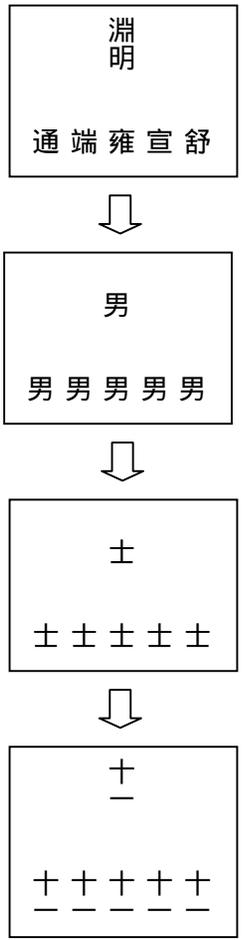
どうやら「責子」の解読は、数の位取り表記に始まって、0使用の提唱で終わるようです。

天	通	雍	阿	阿	雖	白	卍
運	子	端	宣	舒	有	髮	卍 責
苟	垂	年	行	已	五	被	卍 子
如	九	十	志	二	男	兩	卍 卍
此	齡	三	学	八	児	鬢	卍 卍
且	但	不	而	懶	総	肌	下 <sub>1</sub>
進	覓	識	不	惰	不	膚	下 <sub>2</sub>
杯	梨	六	愛	故	好	不	下 <sub>3</sub>
中	与	与	文	無	紙	復	下 <sub>4</sub>
物	栗	七	術	匹	筆	実	下 <sub>5</sub>

下4と下5の二行において、いままでに注目した 無・与・与・匹・七 の五文字以外を横にたどると、

「復紙文中実筆術栗物」=「復紙文中実筆術慄物」、  
「紙文中」つまりこのテキストの中には「筆術慄物」が「実(ぎつしりつまっている)」である、と解せます。「筆術慄物」とは、戦慄がはしるような凄い「筆術」ということでしょう。つまり「復紙文中実筆術栗物」というのは、今までの結果意外にも他の凄い符合が潜んでいる、ということになります。以下でこのことについて探索していきましょう。

唐突ですが、説文解字(漢代)によれば「土」=「十」+「一」です。「土」は男子。つまり「十一」=「土」+「男子」と解せます。「雖有五男児」、つまり陶淵明には五人の男子の子がいます。そして彼も無論「男子」。つまり



このことは、「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」という「十一」個の数の和を五個の「十一」に分割することと符合します。さらに五人の息子のうち雍と端の二人だけが同じ年、つまり双子であり、テキストと一緒に登場していたわけですが、我々の五つの「十一」に六

ついても、上4においてのみ「十一」が二つ現れていました。この二つの「十一」はテキストの「十」に「十」と「一」の二重の意味を持たせることによって生じたわけですが、テキストの「十」の箇所である上4行を左からたどると、「如九十志二男両」です。この七文字を両端から中心の「志」に向かうようにたどってみましょう。七文字の中心「志」に含まれる「心」を、両端から中心の「志」に向かうようにたどれ、という指示と解してみるのが、まず

「如九十志二男両」

において指示と解した「志」の下の「心」の部分を除いてみると

「如九十志二男両」 「如九十志二男両」です。

さらに

「如九十志二男両」

「如九十志二男両」

「如九十志」 + 「志二男両」  
「如九十志」 + 「両男二志」

「両男」とは、二つで対をなす男子。

「両男二志」とは、二つで対をなす男子が二つの「志」に該当する、と解せます。これは雍と端に二つの「志」を充てたとする我々の解釈と符合します。さらに「如九十志」は、「如九、十一」「つまり」「志」=「十一」だ、というのと解せます。

つまり**双子の雍と端は二つの「志」に該当し、「志」=「十一」であるということとなり、我々の推察と完全に符合します。**

前出の説文解字（漢代）にあつては、「志」=「之」+「心」であり、「志」+「心」ではないことには注意すべきでしょう。しかし陶淵明の時代にすでに存在した隷書の表記では、「こころざし」は「志」の形であり、彼が「志」「志」+「心」というウイットを思いつくことは可能です。

ところで五人の子どもの名前には、こんな意味合いが隠れています。

舒 ・ 心中の思いをのべる

宣 ・ 述べる

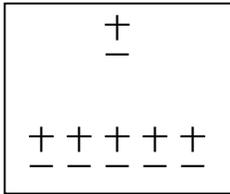
雍 ・ ふさぐ

端 ・ はし

通 ・ つらぬきとおす・すらすらと事がはこぶ・つかえることがないさま

雍・端は続けて読めば、雍端、「端をふさぐ」です。これは「匹」「四」と「巳」「巳」に符合します。「匹」「四」の操作は、「一三三五六七八九十」「一三四五六七八九十」とする、つまりは「つかえることがないさま」にする操作でした。一方、「巳」「巳」の操作は、同一行での「五」+「巳」という足し算を可能にし、つまりは「すらすらと事がはこぶ」ようにした操作でした。しかし、「一三三四五六七八九十」では「つらぬきとおす」ことにはならず、さらに「端をふさぐ」ことが必要だったわけです。そして、「一三三四五六七八九十」という「端をふさぐ」操作のかわりに、「一三四五六七八九十」「一三四五六七八九十」という「端をふさぐ」操作が行われた、というわけです。

以上の完全な符合の中で、とりわけ注目すべきは、



です。これは前述のとおり、「無 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十」ということと完全に符合します。陶淵明が零に数としての市民権を与えるべきだと主張しているのは確かです。

0の意味合いを「無」として表記しながらも、0というモノを 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 等の数の仲間を含めて扱うこと、つまりは0にも数としての市民権を与えることで、位取り表記が常に可能になる、つまりは筆算において「すらすらと事がはこぶ」ということに陶淵明は気付いていたのです。そして西暦356〜427年という彼の生きた時代を考えると、このことは中国の数学史上、とても重要なことです。

田園での生活の中で、周囲に自分ほどの知識人がいるわけでもなく、また、数表記の位取りと零の使用を提唱してみたところで、その値打ちを理解するほどの権力者もいなかったでしょう。そうであれば自分の素晴らしい発案を詩に託して「心中の思いをのべ」たことにも納得がいきます。

北海道倶知安高等学校数学科 原田 牧夫